

渡邊 英夫先生を送る

経済学部長
細川 滋

渡邊英夫先生は、2007（平成19）年3月31日をもって、本経済学部を定年により退職されました。先生は、香川大学にご着任以来、教育学部に23年6ヶ月、本経済学部には12年の、併せて35年6ヶ月の長きにわたってフランス語やフランス文化論、ヨーロッパ文化論の分野で研究教育を続けてこられました。香川大学は、先生の在任中の多大のご功績に対して本年4月に香川大学名誉教授の称号をお贈りしました。

先生は、1943（昭和18）年9月10日に東京でお生まれになり、香川県立高松高等学校を経て、1964年4月に京都大学文学部文学科（フランス語学フランス文学専攻）に入学されました。そして、1968年3月に同大学を卒業後、同年4月に同大学大学院文学研究科修士課程に進学され、1970年3月に同修士課程を修了された後、パリ大学人文学部附属フランス語学教授研究所に進学されました。1971年9月に同研究所を中退されて、同年10月に香川大学教育学部に助手として就任されました。その後、1973年4月に講師、1975年4月に助教授、1987年4月に教授に昇任されました。そして、1995年4月に、本経済学部新たに設置された地域社会システム学科の教授として移籍されました。

先生の研究テーマは、「文化の共約性—翻訳可能性」ですが、これまでに発表された論文の根底には、常に「文化」もしくは「文明」への関心があります。これが先生の関心の一つとしてまず挙げることができるもので、フランスの文化・文明が、普遍性を強調されてくる中で、現代の多文化主義とは相容れないものとなり、植民地主義を合理化する役割を担わされるものと捉えられ、その結果として、フランスの文化・文明を批判的な眼を通して分析されています。

先生のもう一つの関心は、一つのある言語から他の言語への伝達の可能性の問題、翻訳の問題で、研究テーマの中心をなしており、ここに中心的関心が置かれているように思われます。具体的にはフランス語と日本語の共約性の問題を対象とされますが、この2つの言語に限定されるわけではありません。研究成果は、いずれもフランス語で著されておられる、香川大学経済学部研究叢書の一つとして刊行された *Le français langue étrangère en tant que critique culturelle* (『フランス文化論序説』, 2004年) と、その2年後に刊行された *Enseignement et Traduction des Langues étrangères* (『外国語教育と翻訳』, 大学教育出版, 2006年) に結実されています。

教育面でも、先生は香川大学のフランス語教育に尽力されました。教育学部時代には、総合科学課程にゼロ免コースとして言語文化コースが設置されると、フランス語文化専攻の学生を指導されました。本経済学部では、隔年ではありましたが、演習も担当され、フランス文化にとどまらず、社会論をも含めて、温かいまなざしで学生に対する卒論指導に当たられました。また、経済学部に移籍される以前から、本経済学部とフランスのツール商業大学院大学との間で結ばれていた学術交流協定に基づいてフランスから本経済学部に来てくる留学生に対して、また、本経済学部からフランスに送り出す学生に対して、専門委員としてお世話をされ、交流の発展に尽力されました。

最後に、管理運営面では、本経済学部へ移籍されてから、入試委員長(1998年)、入学者選抜方法等研究委員会委員(1998-1999年)、全学共通科目外国語部会委員(1997-2001年, 2003-2004年)を務められました。体調を崩されたこともあり、入試委員長を経験されて以降は、各種委員の免除を願い出るという状態が続くことになり、本経済学部としては、残念なことでした。

定年による退職とはいえ、多大な業績を残された先生を失うことは、経済学部にとって大きな損失であります。とはいえ、退職後も引き続き、非常勤講師としてフランス語教育を担当いただいております。どうかお身体に十分留意されて、私ども後輩のために、今後とも、ご指導・ご鞭撻下さいますよう、お願い申し上げます。